

『野田真吉の暁』の「暁」——父が見たもの

亙 純吉

父野田真吉は、多様な価値観が混在し変化し続ける戦後、映画制作をはじめ詩作、評論をとおして創造の自由あるいは人間の自由とは何かを求め続けてきました。著書『ある映画作家 フィルモグラフィ的自伝風な覚え書』（1988年、泰流社）、『野田真吉・ある記録映画作家の軌跡』（1981年、風景社）には時代や社会の状況に応じた「映画作りとその生きざま」が描かれています。そこには、映画作りの姿勢が「作り手である作家」と「作品を見る人びと（視聴者）」との相対関係的な視点に立脚したコミュニケーションを築けるなら、いつでもどこでも人びとの知の再編を促す現場となりえることを暗に指摘しているのだ、と私は思っています。

一般に、人は自身を語る際に、社会的文化的な人間関係、時間経過、権力構造等によって語り方が変わります。時には自身の経験そのものを語れない、あるいは記憶の外に追いやり、改作する（嘘の創造）を含みます。私は大学で文化人類学、映像民俗学等の研究教育に携わってきましたが、当該分野ではフィールドワークによる聞き取り調査が課題を討究する際に重要な位置を占めます。対象とした人びとが描く彼らのイメージを記録し、その本質を的確に押さえることを努力することが重要とされています。したがって、自身の価値観を反映する誘導尋問や何故(why)という問いを避けます。人びとは、答えられない、人間はすべてのこと知っているとは限りません。知らない、答えられない、答えたくないなどの回答も回答なのです。人びとの生きざまを記録するドキュメンタリー映画では、制作の現場における作家の哲学／作家性が強く問われ続けているのは、このためです。フィルムに記録されたものには、映像としてある時空間の事象が焼きつけられ、それを再編していく創造の作業がなされるからです。野田真吉は60年安保闘争のフィルムを編集する作業にあたり、その姿勢を次のように述べています。

私はこのような時代の重要な転機となる事件を対象とした記録映画は、せめて歴史の一側面の鏡であればと思って、極めて客観的に、見撃し、体験し、とらえた事実を表現し、こじつけがましい成果や評価を語らないで、見る人々の判断、反省の材料として提出、提示する映画になるようにつとめた（前掲『ある映画作家』、56頁）。

目の前に広がる現場の事象に真摯に立ち向かいそして冷やや

かにとらえ、映画作品として作りだす。それには、「うまく言葉にできない」「それが私たちのやり方」としか回答できない／上手に説明できないとする生きざまを映像化することでもありません。父が民俗誌的な映画に晩年積極的に取り組んできたのは、「見える」「見えない」「想い描ける」「語れない」「感じる」ことの映像表現を追求し、同時にそこに自由な映像表現の可能性を見いだしたからでしょう。そして民俗の情念、生と死、神、靈魂など言語の壁を越えたテーマを製作スポンサーのしがらみ（作品の制作意図や経済的な縛り等）から解放された自主制作映画にこそ、自由な映画表現の高みを探しだしたからです。

信州遠山郷下栗の霜月祭を題材に制作された映画《冬の夜の神々の宴》（1970年）は、私自身も制作に参加し録音をまかされたこともあり、その完成には興味がありました。民俗祭祀を時系列にそって説明を加える映画とは明らかに違っていました。映画は、無音で文字のみで霜月祭の解説から始まります。続いて集落の情景がやはり無音で描かれます。そして神事にカットイン。そこには炎が舞い、湯が煮えたぎり、紙垂、おんべが揺れうごく、仮面をつけた神々が舞い、囃子や祭文、会話等の音があふれる世界がひろがって行きます。無音とともに神々の宴が閉じられる。太鼓が置かれた静まりかえった祭場、静寂は集落の情景へと続き、終わります。

言語では言いあらわせない音、静けさ、調べ、立ち居振る舞い、身体技法、舞に酔いしれ無我の境地で踊る者、煮えたぎる湯釜、激しく時には穏やかに燃える炎、立ち上る湯気と煙、民俗の情念あるいは柳田國男のいう「心意」を映像叙事詩としてまとめています。作品の前後に私たちが「見える」集落の情景を無音で表現し、見えない神事の心象風景を音曲が奏でる夢幻の中に誘うようにして。

遺作となった《生者と死者のかよい路—新野の盆おどり・神送りの行事》（1991年）のエンディングも盆提灯を焚き上げ、秋唄

盆よ盆よと楽しむうちに
いつか身にしむ秋の風

盆よ盆よと春から待ちて
盆がすぎたら干草刈り

を歌い家路に帰る人びと、煙が天を目指し上り、山の遠景が映しだされる。黒い画面とともに次の年の祖霊との再会を待ちわびる「秋唄」が約3分続いて作品は終わります。目に映る風景や事象、耳に聞こえる音や言葉をフィルムに記録すること、をとおして人びとの目に見えない、うまく語ることの出来ない内的な「心意」を描くことを映画作品として希求していたようです。



《生者と死者のかよい路—新野の盆おどり・神送りの行事—》

父野田真吉の生きざまを個人史として深く話を聞くことは、私自身が30代に東京の実家から離れた関西で過ごしたこともあって、多くはありません。面と向かって文学青年の夢、戦争体験、家族については語りあったことはまったく記憶にありません。恥ずかしがりやで寡黙な父でしたので、よく家に集まってきた映画人や友人との会話や議論の中に断片的に語っていた記憶しかありません。唯一の例外は1977年に父のお供で宮崎の東郷町に高森文夫氏を訪ねた時です。著者『中原中也 わが青春の漂泊』を執筆にあたり、中也とその周辺の人びととの出来事の記憶を氏とすり合わせるためでした。時代をスリップし、様々な出来事について行ききしつ語る二人の姿の中に、父の青春時代像をかいまみました。

映画、演劇、詩作等の文芸、評論等の創造的な活動は言うまでもなく対社会的／人間的な自由を求め生きてきた父が内に秘め、多くを語らなかつたトピックは家族と戦争です。息子の私にも多くを語らなかつた、熟知たる思いがあったようです。恋愛や結婚のいきさつについても一切語らなかつた。私は、小学校4年生には自身の出自を知っていましたが、この話は暗黙

の了解とされていたようです。この辺の詳しいいきさつは、遺品として残されていた日記・手紙などから知ることになりました。GHQの検閲開封済みのシールのある恋文なども遺っていた。「生きざま」を語る・話すことの難しさ、心の中に引っかかり話すことのできない世界があったようです。それを質すすべはもうありません。

戦争については前掲『ある映画作家』の冒頭に「戦前、戦中のこと」に簡潔に記されていますが、戦地での出来事をめぐる問答は語られていません。「どうせ鉄砲の玉に当たり死んでゆく身、はかないものよ」、としか私には語ってくれなかつた。しかし遺品の中にノート『ある兵隊の手記(1941→1945・3)』と「一兵卒のメモ」があり後者には戦地中国で書き留めた手帖の断片が50ページ弱あった。断片であったのは検閲を避けるためで父の記憶の選別の結果のようだ。このメモをもとに手記は書かれていました。

1941年(昭和16年)8月11日付け母親に宛てた手紙から始まります(この年の5月に召集される)。武昌に派遣され「輜重輸卒が兵隊ならば、チョウチョウトンボも鳥のうち」といわれた輜重隊の雑兵に編入されました。その夏部隊にコレラが発生し、終息を待って運よく帰還できました。広島宇品港に検疫のため碇泊した船上に画家で戦友だったA氏と夜更けに赤ん坊の泣き声を聞き、生きて帰ったという実感を受けとめた心情をほきだした未定稿の詩があります。この詩には船が瀬戸内海に入ったときA画伯が晴れた秋空に鳥と対応するように浮かんでいた雲をながめながら「あ、極楽の雲だ」と感動をこめていったことが伏線にありました。

碇泊

青い影のような島にかこまれた港の夜更け

波のささやきも なく

風の歌もなく

くもさへあるか なきか

月の光は海底に沈んで睡る

ただ、兵隊を満載した黒い船が数隻

煙を吐いてまつてゐる。

どこの岸からか

赤ん坊の声が断続する。

昭和16年10月再度召集され、東満州虎林の歩兵部隊付き輜重

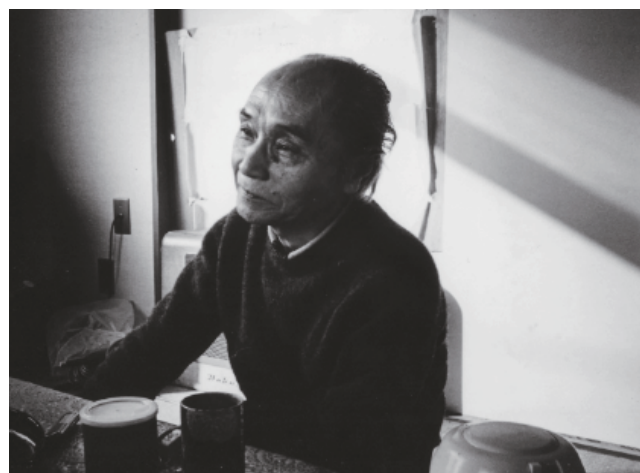
隊に組み込まれました。この部隊が冬季に行軍をするのですが、最後のページには寒さや飢え、疲労、睡魔のはてに目的地に到着したときの記述があります。

美しい朝。命をひろったうれしさ。生命のおとさに、美しい朝をいただく。いぶされた眼はあかぬ。みんなの顔はたきびのすすやはねあがった土でまっくろだ。

手や耳、顔ははれ上がっているが、つかれた顔だが命のあったよるこびにビスケットをかじりながら泣きたいほどうれしい……………(註以下欠落)

父は私的な出来事や戦争体験はあまりにも生々しく、言葉で十分に語ることの出来る域に至らなかったのではと思っています。砲火を交える戦いについては、沈黙を守っていましたが、戦病死した兵についてはボソと語ってくれたことはありました。見えない／見たくない／忘れ去った／封印した世界もある、と同時に自身が確かに見てきた「生きている瞬間」の世界もあります。その世界の表現はすべての感覚を研ぎすまし、言葉を殺ぎおとした先にある明暗顕漠の境目から発するものを見いだす作業ではなかったかと思っています。野田真吉の「暁」は揺れ動く微細な境界の奥から発せられる表象ゆえに、作品に触れる者にさまざまな「きづき」と「はっけん」をもたらすのではと思います。「暁」とは自己の表現とそれを受け止める他己の相互の関係が生みだす新たな創造の場—『暁』ともいえるのではないのでしょうか。

わたり じゅんきち／駒沢女子大学名誉教授



野田真吉 1984年

第19回中之島映像劇場
野田真吉の暁—配布資料をウェブに再掲
発行：国立国際美術館
資料発行日：2020年10月2日
主催：国立国際美術館、国立映画アーカイブ